

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	多田孝志
2. 審査委員	主査：(上越教育大学教授) 梅野 正信 副主査：(上越教育大学教授) 越 良子 委員：(上越教育大学教授) 安藤 知子 委員：(上越教育大学教授) 林 泰成 委員：(鳴門教育大学教授) 西村 公孝
3. 論文題目	グローバル時代の対話型授業の研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者多田孝志から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査 日時：平成28年2月11日(木) 14時00分～14時30分 場所：上越教育大学 人文棟2階 205教室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、序章および終章を含む、7つの章から構成されている。</p> <p>序章 研究の目的、意義、方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 問題の所在 2 研究の目的と意義 3 研究の方法及び構成 <p>第1章 グローバル時代の人間形成の要件の考察</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 グローバル時代の人間形成に関わる研究の変遷 2 グローバル時代に人間形成に関わる新たな教育の潮流 3 グローバル時代の人間形成の定義と要件 <p>第2章 対話型授業を支える対話理論の考察</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 人間形成に関する多様な対話論 2 対話の概念 3 グローバル時代の対話 <p>第3章 グローバル時代の対話型授業の要件の考察</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 グローバル時代の人間形成に関わる学習方法論 2 対話型授業の特質 3 グローバル時代の対話型授業の定義と要件 <p>第4章 対話型授業の実践的研究</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 対話型授業の実践分析の観点と配慮事項 2 対話型授業の実践研究校の実践の分析・考察

- 第5章 グローバル時代の人間形成を希求する対話型授業の提唱
 - 1 理論研究と実践研究の往還・融合の有用性
 - 2 グローバル時代の人間形成を希求する対話型授業の要件
 - 3 対話型授業の実践開発研究校による実践研究の検証
 - 4 対話型授業の実践開発研究校による実践研究の検証結果と分析
 - 5 グローバル時代の人間形成を希求する対話型授業の授業理論の提示
- 終章 研究の成果と課題
 - 1 研究のまとめ
 - 2 今後の研究の課題

各章の概要は以下の通りである。

序章では、対話型授業に関する先行研究を検討し、本研究の意義を導き出している。第1章～第3章は理論研究、第4章は実践研究、第5章は理論研究と実践研究を総括する章となっている。

第1章では、第二次世界大戦後の論考を考察・分析した上で、グローバル時代の人間形成を念頭において、新たな教育の潮流である持続可能な開発のための教育、21世紀型能力に関する答申や報告書を分析、整理し、グローバル時代の人間形成の要件を導き出している。

第2章では、ブーバー（Buber）、ピカード（Picard）、ボルノー（Bollnow）、バフチン（Bakhtin）、フレイレ（Freire）などの人間形成と対話との関わりに関する先行研究を整理し、本研究における対話の概念、対話の形態・機能・類型・基礎力について考察を加え、対話の特色、要件を導き出している。

第3章では、第1章、第2章をふまえ、グローバル時代の対話型授業に関わる学習理論の、理論上・実践上の特質を整理し、対話型授業の定義、構成要件を導き出している。

第4章は、実践研究として、調査対象とした4校の対話型授業への取り組みを複数年にわたり継続的に調査、分析している。研究紀要・授業記録・研究協議会記録などの文献研究とともに、観察・面談等に取り組み、理論研究と実践研究の融合と往還、研究推進体制の進捗性や開放性などが、実践研究の推進に重要であることを指摘している。さらに、本章では、第3章までに導き出した要件をもとに調査対象校の実践研究を分析し、グローバル時代の対話型授業の特色と課題を整理している。

第5章では、1章～第3章及び第4章から導き出したグローバル時代の対話型授業の要件を12要件に整理し、その妥当性・有効性を検証するため、新規の研究協力校で検証授業を行い、妥当性・有効性を確認したうえで、グローバル時代の対話型授業の学習理論を示している。

終章では、グローバル時代の対話型授業の意義を再考察するとともに、今後の研究の課題を整理し、本研究論文全体のまとめとした。

2. 審査経過

本研究の審査は、次の観点について行った。

1) 研究目的の妥当性と論文構成の整合性について

本研究では、はじめに、グローバル時代の対話型授業についての理論的考察、また、学

校全体の実践を対象とした長期にわたる対話型授業の調査・分析研究の必要が指摘されている。このような問題意識に対し、先行研究を考察し、グローバル時代の人間形成、対話、対話型授業の定義をしている。また、実践研究として、学校全体での長期にわたる対話型授業の取り組みを調査・分析している。こうした理論・実践研究を融合させ、グローバル時代の対話型授業の学習理論を提示しており、研究目的の妥当性が認められた。

論文構成に関しては、グローバル時代の対話型授業に関わる先行研究を精緻に考察し、その成果を活用し、グローバル時代の対話型授業の要件を整理し、これをもとに、実践研究を分析している。実践研究から導き出された新たな要件を加えて12の要件とし、その妥当性を改めて授業研究で検証、考察する作業を通して学習理論を提示しており、研究目的と論文構成に、整合性が認められた。

2) 研究の独創性と発展性について

本研究論文は、対話の概念、対話型授業の理論的考察の成果と、学校における対話型授業の調査・検証の成果を融合することが、グローバル時代の人間形成に資する対話型授業を開発することを実証した研究であり、研究の独創性が認められる。実践研究においては、長期にわたり、学校全体で対話型授業の実践研究を調査・分析対象校としている。対話型授業に関する実践研究は、これまでも実証的研究を伴ったものが見られるが、単一授業の談話分析や小規模集団に対する教授・学習過程の分析が一般的であり、学校全体での実践研究を対象とした3年以上の長期にわたる調査・分析を行った研究手法はみられない。本研究の独創性及び発展性を確認することができる。

3) 教育実践への貢献について

本研究で得られた成果は、理論と実践との往還的研究で得られた知見であり、グローバル時代の人間形成に資する対話型授業の理論的解明と、それを具体的に推進するための要件を明示した、研究と開発の両側面を併せもっている。具体的な授業段階において活用可能な研究成果として教育実践への貢献度は高いものと思われる。また、学習指導要領の改訂、教育実践の課題に重ね合わせる形で、グローバル時代の人間形成を希求した対話型授業の今後の可能性を導き出した理論・実践的研究であり、学校教育、教育方法、教育実践に関わる研究成果としての高い貢献が認められる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、多田孝志氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。